

presented by MIBURI

R18 for adult only

presented by MIBURI

presented by MIBURI

presented by MIBURI

美  
武  
里  
の  
本

R18 for adult only



美武里の本 5





contents

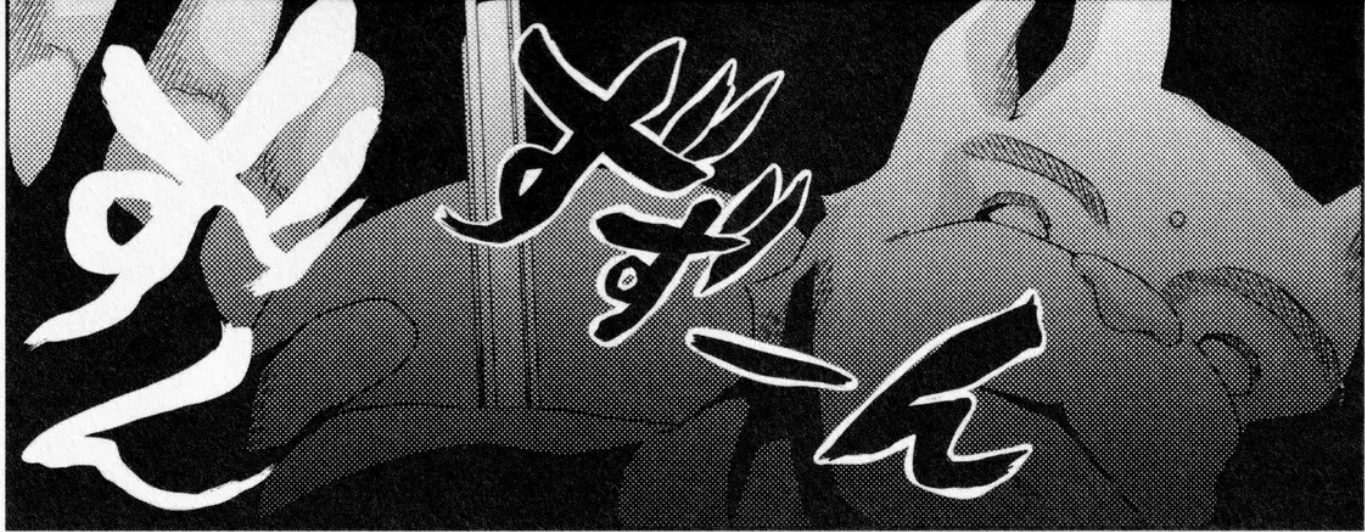
美雅 5 ~ 27

やまねこ 28 ~ 33

風雷雨シロ 34 ~ 45

和泉美和 46 ~ 61













ほくらみる！  
欲かいた  
願いなんぞ  
するからバチが  
あたるんだよ

なにそれ？！  
少しは気のきいた  
優しい言葉の  
ひとつでも  
かけてくれたって  
いいんじゃないの！？

見ないフリ  
見ないフリ

# Happy 修学旅行

Presented by 美雅

しかもコイツミ



こんなナリを  
してるけどミ  
**男だ！！**  
同級生にはヒミツにしてるけど

えっ  
っ





ユキちゃん  
きてくれね  
のオ!!

みんなに風邪  
うつすと思い  
からってサ!

いミいや  
そーいうコト  
いなくてサッ

コト

マジかよオ  
せつかくの告白  
暴露パーティー  
だったのに

なんだデメエ?  
わたしだけじゃ  
不満ってか!?

カミカケルも  
そんなコト思っ  
ないよな? な?

わリイ

ちよっくら  
トイレ

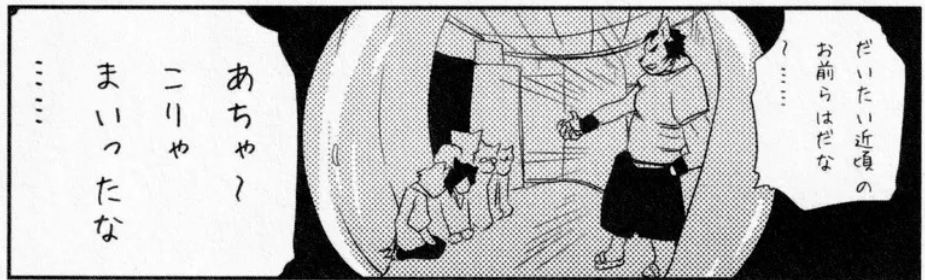
キミ、キミさまあ  
敵前逃亡は  
重罪だぞっ!!











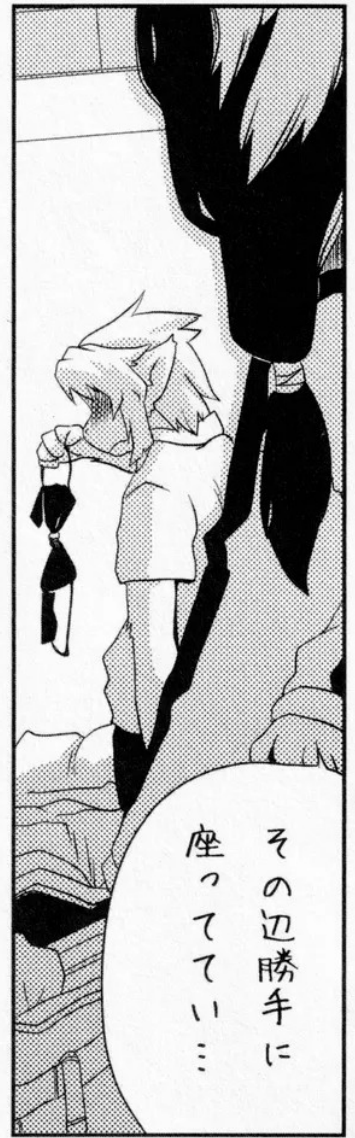




あー

ぐわー

ヤダヤダヤダ  
ごめんごめん  
ごめんごめん



その辺勝手に  
座っててい...



ガミ  
ガラしてると  
いまちよつと  
苦しくてミサ!

てゆうかあ  
色気無すぎだよね  
ニーいうのミ  
ミミ エヘヘ!



カケルはサミ  
昔から変らないね  
いつもボクのこと  
気にかけてくれてる



なミミ  
何言ってんだよ  
男が色気も  
なにもミミ...

そミそつか!  
そう言われれば  
そうだよネミ  
あははははっ



それよりもミ  
もっと気を付けとけよ  
男ってバレたら  
何言われるか  
わかんねえからな

















ボミボクは  
いいよ……  
……その

カケルが  
そういうコト  
したい……なら



はうッ!!

ギン  
ギン  
ギン



バミバカ  
いえよっ!!

みんなだっ  
てこのすぐ外に  
居んだぞッ!?

はじめて  
なんだ……



はじめてこんな  
勇気だせたのに  
フツの友達なんて  
戻りたくない……

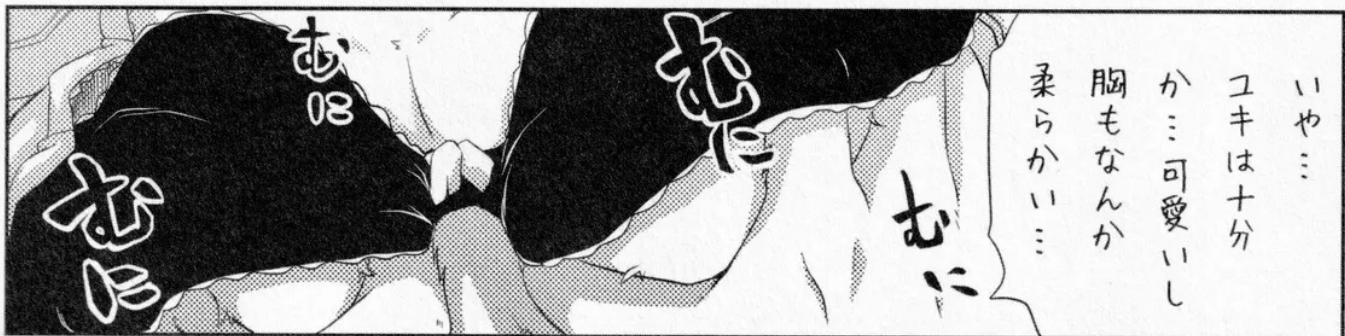
戻りたくないよ  
……カケルう







「……」めんね  
本物の女の子  
じゃなくて……



いや……  
ユキは十分  
か……可愛いし  
胸もなんか  
柔らかい……



あっ!!  
「めんめん  
ごめん!!

「……」  
こーいうのって  
慣れてなくてっ



や……やっぱ  
下手クソ  
だった……?

カケルは  
ミ初めて?



や……やあ  
ちよっ……痛っ

ミううん



ボクも初めては  
一番大好きな人に  
あげたかったからミ



だから初めてが  
カケルで  
本当によかったな  
ミミミミミミって

ユキミ



ミボクのも  
脱がして  
いいよ

















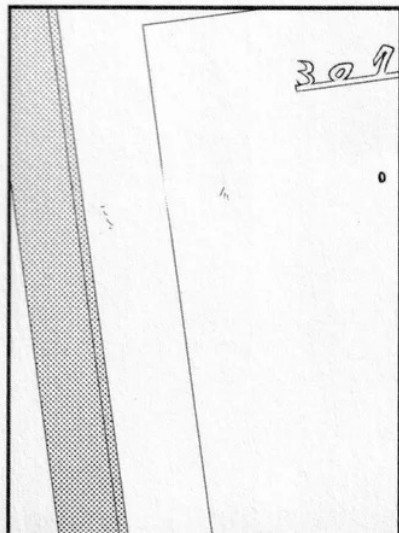




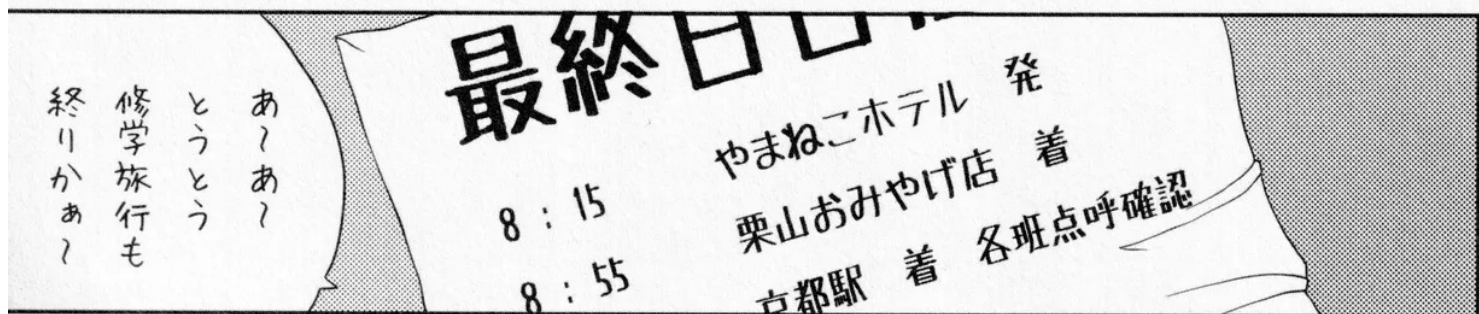
















おわり



# あとがき

はじめまして&こんにちは、この度はこの本を手にとって頂き  
ありがとうございます！

男の娘が流行っているようなので、流れに乗ろうと試行錯誤  
してみましたが、こんな有様でした！

男の娘はブラをするのかどうか悩んでたところ、ツイッターで  
意見をくださった皆様ありがとうございます。

ブラはしてない方がいいという  
意見が多かったけど、結局  
女装子さんに「ブラはあたりまえ」  
って言われて描いてしまいました。

昔の甘酸っぱい黒歴史でも  
思い出しながら読んで頂けると  
幸いです。

それではまた機会がありましたら  
よろしくお願いします。

今回も快くゲストを引き受けて  
くださったやまね子様、  
いつもお世話になってるシロ様  
ありがとうございました！

最近は男の娘とあわせて女装子も  
いいなと思い始めました！重症です！





何の変哲もない自分。

普通の街。



そこで今俺は  
至極普通に待ち合わせ。



あ

お待たせしました

電車おくれて...





傍から見たら

こいつとは普通に付き合っていて

一緒にいると二日があっという間に  
過ぎていく。



——まあ、少し  
変わってるよすれば

こいつが少し性欲が強い  
といふんだよ



HOTEL

休憩

通常 1,500円より

深夜 2,000円より



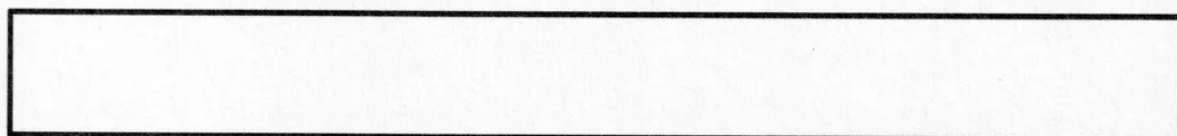
パタパタ

——  
オトコ  
めつてこた。だ。

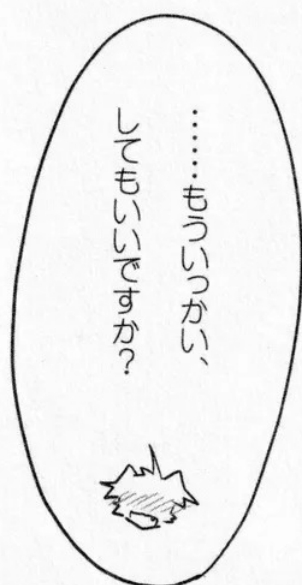




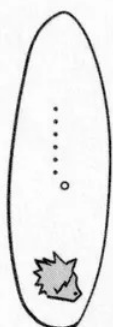




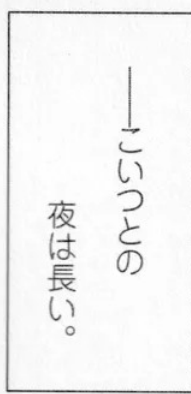
あ、あの



……もういっかゝ、  
しゅもろとあかな？



……



——いっかゝの  
夜は長い。



## あとがき

こんにちはorはじめまして。  
やまねこと申します。

またしてもゲストとしてお誘い頂きまして、  
再びの登場となりました。  
お誘いありがとうございます！

美雅様より

「男の娘ネタだと嬉しいです！」と頂いたのもあり、  
男の娘というのを初めて描いたじゃないでしょうか。  
うーむ、表現がやっぱ難しいですね！

ともあれ、ここまで読んで頂き幸いです。

またどこかで！

やまねこ

1

母なる大地に、陽の光が燦々と降り注ぐ。

その陽射は、赤茶けた大地をガラガラと照らし、地表や大気から、水分すらも奪っていた。

そんな、大地を縦横に切り裂く溪谷の頂上に一人の少年が立っていた。

その黒豹の少年は、腰みのに頭には羽飾りだけの軽装で、無駄なく鍛えられた、豹の名に恥じぬ肉体に、ワシのような眼光を秘めていた。

そして、その手には体の倍ほどもあろう大槍を持っている。

少年は、片足を岩に乗せてスンスンと鼻を鳴らす。

羽飾りに半分隠れた耳も、心なしかそれに合わせてピクピクと動いている。

「もう、雨季か。季節がめぐるのは早いな。よく見れば、水牛も戻ってきたじゃないか」

少年は、おでこに手を当てて、遠くを見ながら独り言をつぶやいた。

そう、サバンナには雨季が戻ってきた。

「それにもう、最初の雨じゃないか」

黒豹の少年が尻尾をユラユラと揺らしながら、呟いたその

先には、大きな雨雲が立ち込めている。

少年は、踵を返し、溪谷を降りていく。

その軽やかな走りは、まさに黒豹のごとし。尻尾でバランスを取りながら、どんどん高度を落としていく。手に持つ大槍も、物ともしないし、むしろ役立っている。

溪谷を降り切った後も、少年の目的地はまだ先である。

スピードを落とすことなく、サバンナを走る少年の横を、ガゼルが嬉々として飛んで付いて来ている。

そして、キロほど走り、バオバブの木を通り過ぎると、少年の目的地の集落である。

文明から取り残されたようなところでありながらも、食料や医者運び込む為の未舗装の道路が通っているこの集落が、少年ケルロの故郷である。

集落には、土壁の家が二〇ほどあり、その周りで牛や鶏が飼われている。

ケルロが集落に戻ると、中央の広場に居た、初老の黒豹が、ケルロに話しかける。

「ケルロ、大地とは対話できたかの？」

「はい、村長。雨季になりました。最初の雨が降ります。水牛たちも戻って来ました」

「ほうほう、確かに雲行きが怪しいの。ご苦労。食事を取りなさい、主は痩せすぎじゃ」

「はい、村長。」



短い会話を終わるとケルロは、大槍を置き自分の家と思しき家に入っていた。

## 2

「お兄ちゃん！おかえりー！お兄ちゃん！」

家の中には、ケルロにそっくりの幼い黒豹の少年が居た。

その少年も腰みのだけのシンプルな格好で、この集落の野性的な雰囲気により一層、醸し出していた。

「ケルロ、父さんと、母さんは？」

「あのね、母さんはくるまっというお馬さんで、街に買い物に行ったよ。父さんは、牛を川に連れつった。あとこれ、お兄ちゃんのご飯だつて」

そう言うのと、ケルロと呼ばれた少年は、ゴロゴロと転がりながら、銀色の皿を押してよこす。

そこには、玉蜀黍の粉で作った餅とトマトスープが添えられていた。

トマトスープはケルロの大好物である。

食事はすぐになくなった。

成長期のケルロにとって、大盛りの餅もスープも大した量ではないのだ。

「ケルロ、おやつ食べに行くか？」

ケルロは意味深な言葉をケルロに放ち、微笑んだ。

「え？おやつ？！食べに行く！食べに行く！」

「うん、ついておいで。」

そう言うのとケルロは、ケルロの手を引いて、家を出る。そして、ケルロは大槍を片手に持つと、テクテクとケルロと歩み出す。

村から出ると、歩を進めると、次第に動物が多くなり、大型肉食獣も見かけられるようになった。

しかし、ケルロの槍の腕前は、同世代の黒豹より、抜きん出ている。並の動物なら、肉食だろうと草食だろうと、物ともしないだろう。

「ねえねえ、お兄ちゃん、なんであのヒョウさんは木に登れるのに、ケルロは登れないの？」

無口で歩いていた、ケルロに急に質問され、ケルロは驚いたが、ケルロも正直に答えた。

「ケルロ、それはね、あの豹さんには鋭い爪があるからなんだよ」

「ふーん、ケルロも爪欲しいなあ」

ケルロは、手をグーパーしながら、手を眺めていた。

そんな、微笑ましい会話をしているうちに、ケルロとケルロは目的地のオアシスに着いた。

「ケルロ、ほら。その草むらからオアシスの中を覗いてご覧」

ガサゴソと草むらの中を進んでいく、ケルロ。

「うわー！！！！お兄ちゃん！すごいよ！果物がいっぱい！」  
ケルロは、今まで誰にも教えたことのなかった、果物が多いこのオアシスに『おやつ』を食べによく来ているのだった。

ケロルは、クロルの後について、オアシスに入ってしまった。

「どうだ、クロルスういだろう？」

「うん、ココナッツにあとアレとかコレとか名前わかんないけど、美味しそう！」

ケロルは近くの椰子の木を蹴り、ココナッツを落とす。

落ちた拍子に割れたココナッツからは、透明な美味しそうなココナッツミルクが滴っている。

「クロル、マンゴーとバナナを取ってくるから待つてろよ」

そう言うのと、ケロルは、マンゴーの木にジャンプし、マンゴーを二つ三つ取り、クロルに投げてやる。

そして、バナナの木に器用に登ると、黄色く熟したバナナを、一房取ってきた。

「クロル、バナナもマンゴーも種があるから気をつけるよ？」  
言ってみたものの、クロルは既にバナナもマンゴーもムシャムシャと食べていた。

自分もと、ケロルもココナッツを飲み、フルーツを食べ始めた。

### 3

もう夕方になっただろうか、集落に戻ってくると、雨がポツリポツリと降り始めた。

ケロルは、クロルを家に返すと、気がかりなことがあったので、村長を尋ねることにした。

「ケロル、待つておったぞ。何処に行つておったのだ？」

「オアシスに弟と行っていました」

「そうか、そうか、ならばよろしい。そろそろクロルも、儀式

の時が迫つてきておつてな、その事で、主に話が合ったのじゃよ」

意味深に語る村長に、ケロルも複雑な顔をしている。

「村長、儀式のことなんですが、やはり俺が、やらなければならぬんでしょうか？」

「さよう、主が一番の近親者じゃからのお、それに、主は何はともあれ、好きものじゃからな。ほほほほ」

村長は、そう言うのとニヤリと笑みを浮かべた。

この村には、代々特殊な伝統がある。

男児が一定の年齢に達したと、村長が判断した場合に、その男児は雨季の晩に近親者の男児が筆おろしをしなくてはいけないという伝統である。

今年がクロルの番だった。

そして、ケロルが一番の近親者である。

ケロルは、村で今までに何度か男性と性交をしており、クロルの筆おろしも、容易いものかと思われた。しかし、クロルはケロルにとって弟である。

ケロルはそのことに抵抗があった。

ケロルはボーっと歩きながら、家についた。

「お兄ちゃんおかえり！そんちようさんなんだって？」

「クロル、あのな、クロル、お前もそろそろ大人になってきただろう？、それで大人になる儀式のためのお話だったんだよ」

「え？！僕、お祭りの夜のぎしきに出られるの？」

「ああ。出られるも何も、今年の祭りはお前が主役さ」



嬉しそうに、耳をピクピクと動かすクロル。

こんな可愛い弟と幸か不幸か、体を繋げなければならぬのだ。

日が沈みかけている。まだ両親は帰ってきていない。

早い、クロルはクロルを寝かせることにした。

「クロル、少し早いけど寝なさい」

「えーお兄ちゃん、まだ起きてたいよお」

「ダメ、大きくならないぞ」

クロルには秘策があった。

#### 4

両親も帰宅し、村一体が寝静まった、丑三つ時。

クロルは、まだ寝ていなかった。正確には寝たふりをしていた。

クロルはスヤスヤと穏やかな寝息を立てるクロルに近づき、首筋の匂いをクンクンと嗅ぐ。

まだ幼い少年らしい、土と太陽の香りがした。

これから、この幼い少年に、悪いイタズラをしようとするのは、えらく気が引ける。

しかし、クロルはクロルにこうして夜這いをしないと、祭りの当日に儀式を行えそうになかったのだ。

手始めに、まず首を舐め上げる。

「ん、あつ、ん」

クロルが一度寝付くと絶対に起きないことを、クロルは知っていた。

レロレロと、首の筋を舌先で確かめるように愛撫する。

クロルは、こう見えてもかなりのテクニシャンでこういったことには年齢の割には長けている方であった。

クロルは首筋から、舌を這わせながら下がっていき、クロルの乳首を啄む。

幼い弟に対して行う不貞行為ではあったが、その背徳的な行為がクロルをより一層興奮させている。クロルは、体が熱くなるのを感じた。

弟の幼い体に欲情しているのであった。

「クロル、可愛い…」

脇を舐めながら、そのかぐわしい少年の匂いに絆されながら、クロルは呟いた。

レロレロと唾液の続く限り、その幼い四肢に舌を這わせ、いよいよクロルは、クロルの腰布に手をかけ、一気に腰布を外した。

そこには、まだ幼いペニスが存在無さげにぶら下がっていたが、ボルテージが上がったクロルはそのペニスをゆっくり口に含む。幼いペニスからは相応しい僅かな臭いがあったが、クロルには気にならなかった。

小さいながらも、同じ年代からしてみればやや大振りなそのペニスを慣れた舌使いで愛撫するクロル。程なくして、ペニスは頭をもたげ、成長し始める。

クロルは舐めるように美味しそうにそのペニスを舌を

這わせる。

先端を剥き、舌で啄いたり、根元から先端に向けて舌を這わせたり、口に咥えて甘噛みしたりを繰り返した。その間中、クロルは喘ぎ続けるも、起きることはなかった。クロルは、起こさないように気を使いつつも、なるべく情熱的にクロルを煽るようにペニスをしゃぶりつくす。

「んあっあっ」

まるで起きている時の反応のような喘ぎ声に、クロルもその淫乱な自身のペニスを扱きながら、行為を続ける。その時だった。

クロルの体が、ビクリと痙攣しペニスが戦慄く。

射精かとも見て取れたが、まだ精通していないクロルは、ドライオルガズムを迎えただけだった。

この家で最も文明的な時計は、月明かりに照らされて、行為の開始から一時間も時間が過ぎたことをクロルに知らせていた。

クロルは、口の周りの唾液を月明かりに光らせ、クロルのペニスから口を離すと、自分のペニスを治めることにした。

唾液を手に取り、潤滑を良くすると、根本から一気に扱き上げる。

快感に体を震わせながら、弟の痴態や過去に行われた淫行を思い出し、一心不乱に自身を慰める。

「あっ！んっ！そんちょ！クロル！あっ！」

「やべ、はんばない、きもちっ！」

手はどんどんその速度を速めて行き、最後に体全身が震え

ペニスが脈打つ。

体液が飛び散る。

一瞬の出来事だが、クロルは確かな快感を感じていた。

「ハアハア。ハアハア」

床に飛び散った体液を指にとり、舐める。

「甘…い」

自分は、なんて淫らな生き物だろう、そんなことは今までに何度も思ったが、今日は特にその思いが強くなった。

この日は、手早く後片付けを済ませ、翌朝の牛の世話のために床につくことにした。

クロルは、夢の中ですごく幸せだった。

何の柵もない、夢の中の世界。

好きなものだけが存在し、傷つけるものがないこの世界をクロルは愛した。

夜は、まだ明けない。

## 5

クロルは、その朝遅く起きた。

結局、牛の世話には行けなかった。

「おにいちゃん！朝だよ！起きて！」

クロルのクリクリした瞳に見つめられて、一瞬クロルはドキッとした。

「クロル、おはよう。よく眠れた？」

「うん、よく眠れたけどね、クロル変な夢見たんだ。」

一瞬クロルはドキッとする。



「あのね、お兄ちゃんがぼくのおちんちん舐めてるの」

まさか、昨日の淫行を言い当てられるとは思わなかった。

「ケロル、そ・それは夢だよ」

「変な夢見るんだね！」

「ああ、夢っていうのは変なものだからな」

なんとか、窮地を切り抜けたケロルであった。

この日も、熱い日だった。

太陽に焦がされた大地は、黒い毛皮のケロルを容赦なく熱する。

ケロルは午後に水浴びに行く事にした。

水場にはケロルの他にも村の大人たちが集まっており、みんな水浴びに精を出している。

ケロルも、腰みのを外すと水に体を沈め、涼を取る。

ふと、ケロルは周りを見渡すと、そこに来ている大人たちの裸が気になってしまった。

黒豹の集落ということもあり、見る人見る人、全員が靱やかな肉体である。

自分の筋肉をより艶やかに見せるボディーパーペイントをした大人。

見れば見るほど、ケロルの脳内は、色事で満たされていく。ケロルはこれ以上、水場に居たら、余計に体が熱ってしまう

と思い、水場を後にした。

ケロルは、その後、いつも通りの大盛りのお食事を終えると、今日の雑事を終えた。

そして、夜。

再びケロルは弟に夜這いをする事にした。

スヤスヤと眠る、ケロル。

ケロルは今日は水浴びに行かなかったもので、ほのかに汗の匂いがする。

それがケロルをより一層興奮させていた。

まず、ケロルは寝ているケロルの横に横たわり、首筋に顔をうずめて、弟の汗の臭いを嗅ぐ。

胸いっぱい弟の臭いを吸い込んで、少しトリップしたような気分になり、今度は匂いを嗅いだところに舌を這わせる。

少し、しよっぱいかったが、ケロルは続けて弟を愛撫する。

胸に手を這わせ、乳首を刺激しながら首筋を舐め上げる。

「んっ！あっ！おにいちゃん……」

ケロルは、一瞬ビクリとしたが、ケロルは起きていない。

ケロルはその事を確認すると、再び舌を這わせ始める。

そして、ケロルはケロルの腰みの中に手を入れ、まだやわらかいペニスをゆるゆると扱く。

しばらく扱くと、ケロルの幼いそれは硬さを持ち始め、すぐに大きくなった。

次に、ケロルはケロルの腰みの中に頭を入れ、ペニスに舌を這わせる。

そこから、少年らしい臭いが漂う。

ケロルは顔を上気させながらも、行為を続ける。

舌を使い、ケロルはケロルを攻める。

前日と同じように、ペニスを剥き舌を這わせ、先端を吸う。

ケロルは、弟のペンヌだということも忘れて、味わい尽くす。  
「ほっほっほ、主はやっぱり好きものじゃったか…」  
その時、声が響いた。

後ろを振り返るとそこには村長が立っていた。

「そ、村長！？こんな時間に何を?!」

驚きすぎて、変な声を出してしまった。

「ケロル、お前と弟の儀式の日取りを知らせに来たのじゃ」  
「た、確かにそろそろですけど、まだ3回雨が振ってません！」

「まあ、そういうと思ったんじゃが、ケロルは早いほうがいいかと思っとな、早速明日、儀式をとり行うことにしたからのおくよろしくなあ」

そう言うのと、アングリ口を開けて驚きを隠せないケロルをよそに、村長は行ってしまった。

その日は、弟への奉仕もそこそこにケロルは眠りについた。

## 6

祭りの日、朝早くにケロルは大人たちの声で目を覚ました。  
やいのやいのと家の外から、声が聞こえる。

祭りの準備をしているのいだろう。

ケロルは、うちの外に出ると裏手に回り、汲んである水で軽く顔を洗い、ヒゲを整えた。

街の中央広場では、村長の一声で、櫓や灯籠が組み立てられている。

傍では、祭り装束の大人たちが、ボディーペイントを入れて

いた。

ケロルは、家の土壁に背中を預け、時間を過ごすことにした。

大人たちの中には、自家製の酒で酔いが回っているものも居る。

「おにいちゃん、おはよう」

眠たそうな目をこすって、家からクロルが出てきた。

本当に眠たいようで、所在無さげに揺れる尻尾もフラフラとした軌道を描いている。

「クロル、起きたのかい。まだ寝ていても良かったのに」

「うん、おにいちゃん。なんか外が騒がしくって」

クロルは、ケロルの頭を撫でてやり、隣に座るように促す。

「おにいちゃん、今日はお祭りなの？クロル、毎年お祭りの日わからなくて」

「お祭りはね、村長さんが決めるんだよ。今夜はクロルの為のお祭りって言っただろ？」

クロルは、キョトンとしたような顔をしながらもケロルを見返す。

「わーい！！クロルが主役?!」

顔がパツと明るくなり、寝ぼけた顔に生気が戻ってきた。

「でも、毎年お祭りは最後まで見たことないからクロル、なにしているかわかんない」

この村では、毎年行われるその特殊な儀式のために、年少者は早々寝かしつけられていた。

ケロルは、いよいよクロルに説明しなければならないと悟っ



た。

「クロル、あのねお祭りで儀式をするんだ」

ウルウルと、見上げる純朴な瞳になかなか卑猥な儀式を説明できない。

「儀式っていうのはね、クロルと俺が…その性交渉するんだ。本当は男同士でしないんだけど…」

「せーこーしょー？それっておいしいの？」

純粹無垢なその表情からその不埒な言葉の意味を理解しているとは思えずに、ケロルは言葉を続ける。

「あのね、クロル。おちんちんについてるでしょ？それを女性の性器に入れるのが性交渉っていうんだけどね、それを今日は、お兄ちゃんのお尻で再現する儀式なんだよ」

クロルは啞然とした表情をしたが、ケロルは更に言葉を続けた。

「痛くないし、逆に気持ちいいんだけど、最初はちょっと緊張するかな…」

「クロル、お兄ちゃんとせーこーしょーしたい！」

そして帰ってきたのは、意外な回答だった。

クロルは、尻尾をフリフリと振って、兄との性交渉に同意し

たのだった。

「そ…そっか、クロルが嫌じゃなきゃいいんだ」

ケロルは頭の後ろをポリポリと掻きながら、いいんだ、ともう一度言った。

「クロル、お腹すいたからご飯食べてくるね！」

そう言う、クロルは走り去り、微妙な気持ちのクロルが残された。

「さてと、手伝いするか…」

## 7

夜、祭りの太鼓の音が響き、焚き火がパチパチと音を立てて、村の中央で焚かれている。

大人たちは酒を飲み交わし、子供たちはわいわいとはしゃいでいる。

村長の隣の席に、クロルは座っていた。

普段は付けることのない羽飾りをつけ、ボディーパーペイントを施している。

ケロルの姿は見えない。

「皆の者！聞くのじゃー！」

「今宵はエデルの息子クロルの元服の義じゃー！」

わーわーと歓声が上がリ、太鼓が打ち鳴らされる。

「そして、元服の義はこれから兄のクロルによって執り行われるー！」

クロルが嬉しそうに笑う。

「皆の者、子供は寝かしつけるのじゃ！」

バタリと音がやみ、子供が家に連れて行かれる。

数分の後に、大人だけが目を血走らせているという、異様な空気に包まれた。

「クロル、入られよ」

フッと、視線が村長の後ろのテントに移る。

すると、中から綺麗な中性的な衣装を着たクロルが出てくる。

顔は、上気し息は荒い。

この村の伝統で、おそらく香や媚薬の影響でこうなっていることは明らかだった。

「クロル、んっ兄ちゃん、はあはあ」

村の中央の祭壇の上には毛皮の毛布がしかれていて準備は万端だった。

「さあ、クロル、中央へ進みなさい」

村長に促され、クロルはクロルを連れ、祭壇に上がる。

「お兄ちゃん…せーこーしーしょーするの？どうすればいいの？」

積極的なクロルの声にケロルは、クロルの唇を奪う。

「んっ！んんっ！…！」

急な接吻に手をばたつかせるクロル。

口を離すと、クロルもケロルも呼吸が荒い。

「兄ちゃん！なにをするのっ！」

「前戯…だよクロル？」

大人たちの視線が熱い。

「これもせーこーいの一部なの？」

「そうだよ、クロル。続きしよ…」

クロルは、クロルの腰みのを取り、半ば硬くなったペニスを露わにする。

周りが、一気に沸きたち、野次が飛ぶ。

レロレロ、と見せつけるようにクロルは舌を這わせていき、ペニスまで舐めていく。

このクロルのボディーペイントは甘く、媚薬の効果がある。  
「クロル、可愛いよ…クロルの全部欲しい、俺のこと脱がして」

そう言うときクロルは両手を広げて、クロルに脱がせて欲しいといった。

そして、クロルは恐る恐るクロルのこの村には似つかわしくない綺麗な服を、脱がし始めた。

「村長、あれどうしたんですか」

村の男の一人が村長に耳打ちする。

「街の若い娘が着ている服じゃ。クロルに似合うと思ってもらってきたのじゃよ。ほほほ」

クロルがクロルの服を全部脱がし終わると、そこにはまた艶やかなボディーペイントを施した、クロルの肌が現れた。  
クロルのペニスは最大限に肥大化している。



「クロル、今日男になろう」

再び、ケロルはクロルに口付けをし、祭壇の上に押し倒した。ケロルは、オロオロとしているクロルのペニスを口淫し、半ば強制的に勃起させる。

「お兄ちゃん、怖いよ…」

「怖くないよ、今気持ちいだろ？」

ケロルの積極的なフェラチオはクロルを完全に勃起させ、周りの大人たちからは歓声が上がる。

「さあ！繋がれ！兄弟たち！」

村長の一声で、ケロルはクロルを押し倒したまま、上に馬乗りになり、上体を寄せると、もう媚薬を使った時点で、柔らかく解しておいたアナルに、クロルのペニスをあてがい、挿入した。

「ふっ…んっ！あっ！クロルのおちんちん、おつきくて気持ちいい」

ケロルは腰を思いっきり落とすと、えらく恍惚とし表情でいる。

「お兄ちゃん…なんだかわからないけど、あったかい…」

「クロル、それを気持ちいいと言うんだよ…っあ！」

しばらく、ケロルがクロルのペニスを味わうと、クロルに再び口付けをする

「クロル、動くね」

と、だけ言い腰を動かし始めた。

「あっ！あっ！あっ！あっ！クロル、もっとついて！」

「お兄ちゃん、気持ちいいよ！もっと！もっと！」

二人の熱く、若い交尾を大人たちが視姦する。

クチュクチュと濡れた音を発しながら、ケロルは激しく腰を振り立てる。

「はっあはあっ！」

ケロルの、肌の大粒の汗が艶やかだ。

「クロル、突いてみて。ほらっ！おきて！腰振ってみて！」

クロルは兄に言われたように上体を起こして、突き上げる。

「あっ！もっと！突いて！あっ！」

「お兄ちゃん！なんかっ！出る！」

クロルの精通は、以外にも早く訪れた。

勢い良く、クロルは兄に種付けした。

「はあはあっ！兄ちゃん…なんか出ちゃった…」

「クロル、それでいいんだよ」

ケロルの胎内から出たクロルのイチモツについて、白い液体が、ケロルのアナルからどろりと出てきた。

「これにて、クロルを成人と認める。よかったな」

長老のその一言で、儀式に幕が閉じられた。  
この二人の兄弟は、その後もこの母なる大地で、幸せに暮らしたという。



～あとがき～

こんにちは！

風雷雨シロと申します。

はじめまして。この度は、親愛なる美武里のご本に寄稿させていただきまして、大変光栄に思っています！

今回は、黒豹ショタ兄弟で書かせていただきましたが、Pixivの方でも獣人の兄弟物ばかり書かせていただいております。自分も初めての同人なのですが、やはり小説って難しいですよ。

まだまだ拙い文章ですが、これからも見守っていただければと思います。

それでは、シロの短編を読んでいただきまして、誠にありがとうございます。

そして、親愛なる美雅様、和泉様、お邪魔いたしました。

コミックマーケット 82 風雷雨シロ

# まえがき

初めましての方もそうでない方もこんにちは、和泉美和です。

ページ構成の都合上、こんなところでの挨拶です。

まず、ゲストを快く(?) 引き受けてくださった

やまね様、風雷雨シロ様 本当にありがとうございます。

緑陽社様、いつもいつもありがとうございます。

最後にこんな作品を手にとってくださった皆様へ感謝。

以下駄文。

いくら言葉を重ねても伝わらないものもあります。

でも、本当にもう言葉もないくらいに言葉を使い尽くしたのかと問われるとそんなことはないように思うのです。

喋りが苦手だと、あとからああ言えばよかった、こう言えばよかったばかりです。言わないで後悔するより言って後悔しろと誰かがいってましたが難しいものですね。

でも言葉は万能ではないですし、どうにかこうにかうまく使いこなせればと思う今日この頃です。

2012年8月某日

和泉美和





**CARL**

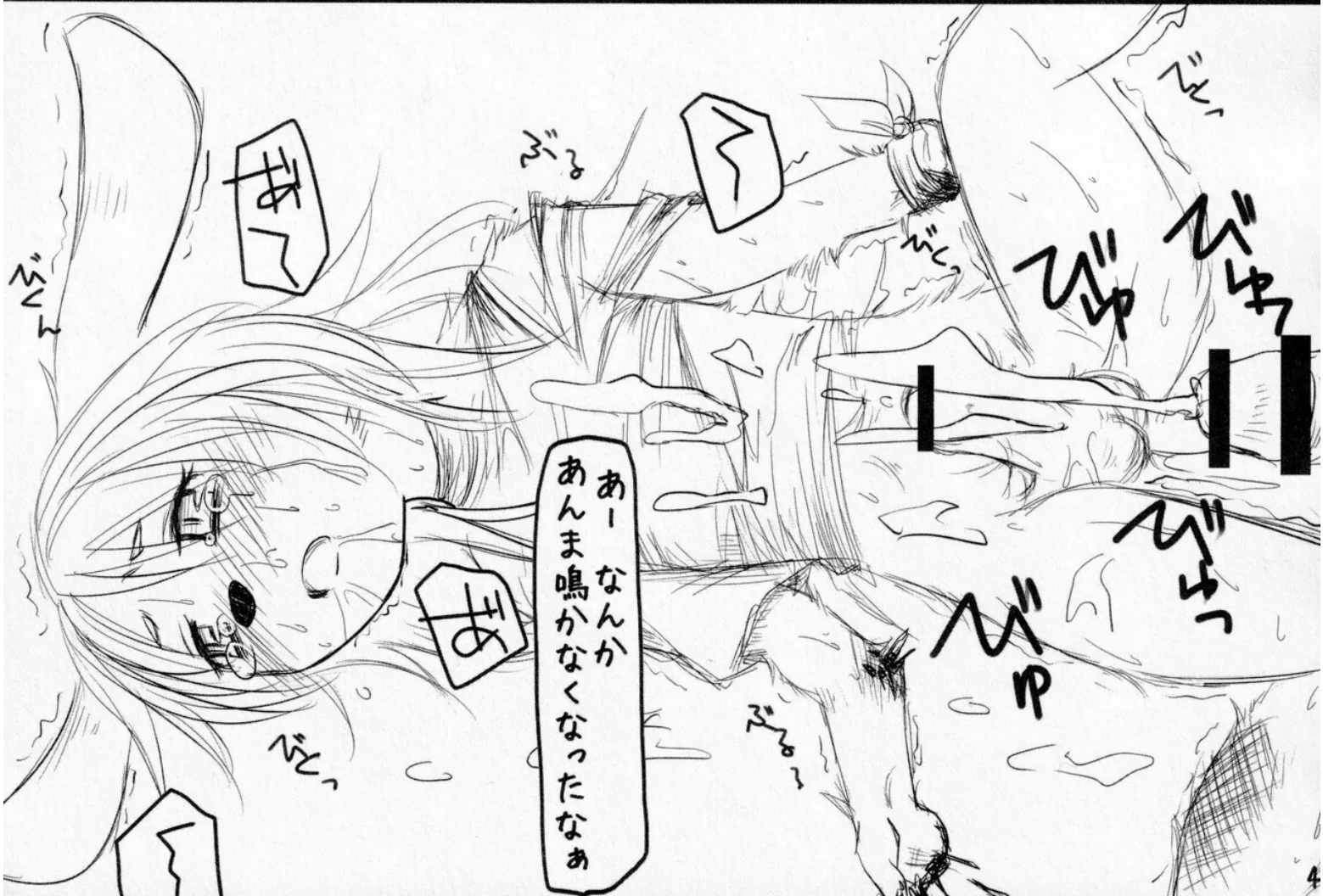
～断章Ⅲ～

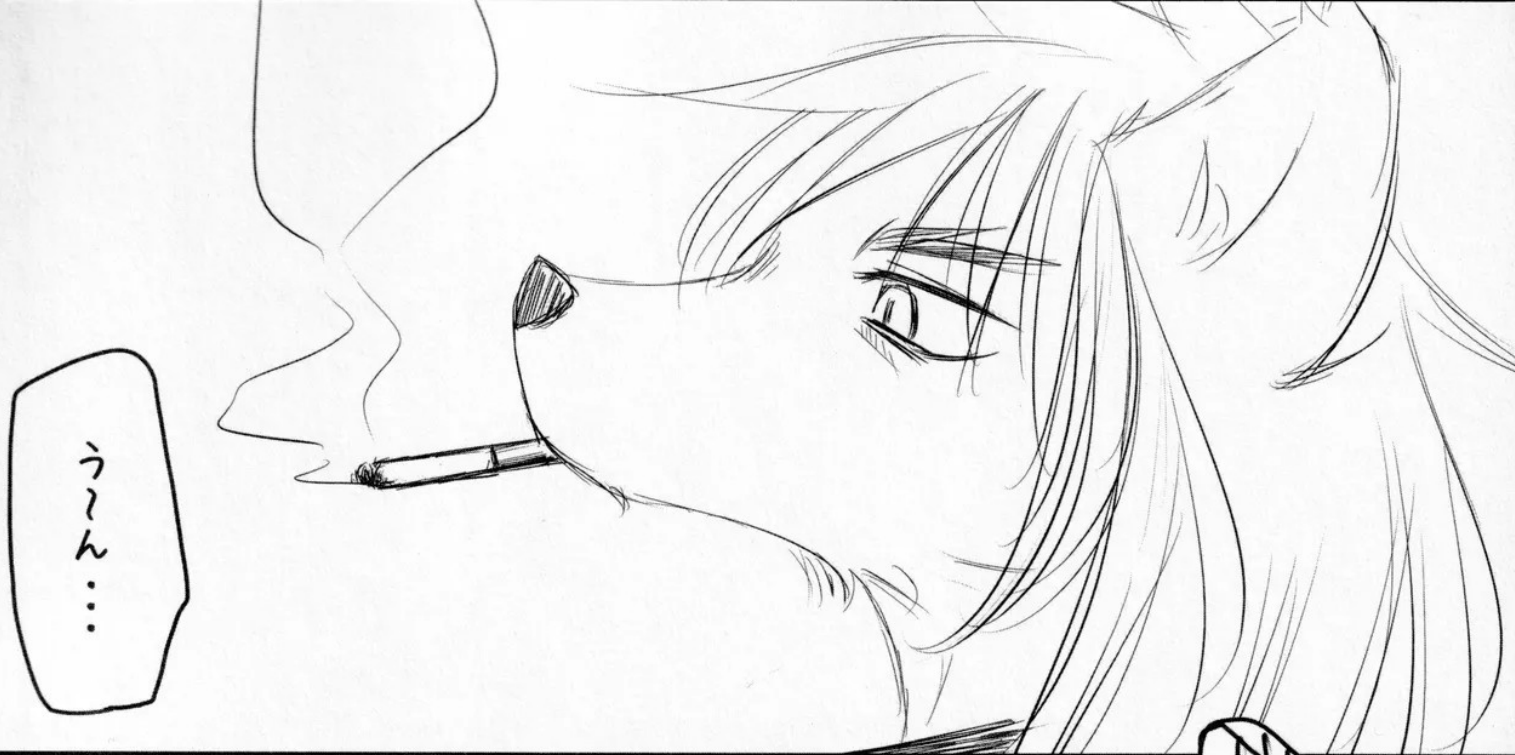
presented by 和泉美和















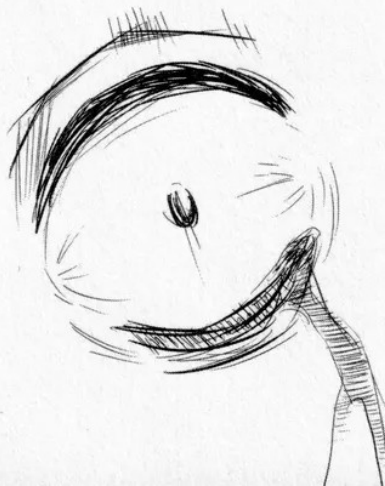






ところで…

いつになったら  
お前の言葉が  
俺を止めるんだ？



ハウンド  
司法府警察の名交渉官  
ヨーキンザエル・ザルタ殿

お前の恋人死んじやうよ (笑)  
くけやけやけやけやけやけやけやけやけやけ

声を嚔らし

咽喉を潰し

血反吐を吐き、

血涙を流す

ああ

それでも…

お前の言葉は

俺の行為を

止めるに至らない

偉そうに語っていたじゃないか

力による正義の執行ではなく

何事も対話により平和的に

解決されるべきだと

どうした？

今まさに

必要だぞ

ああ





対話を引き出す言葉が

俺を止める言葉が

お前の大切な人を守る言葉が

陳腐な言葉

対話

素材に

なりえない

さあ

解決しないのか

やめろと叫ぶだけか

さあ

言葉

アを示して

言わないで後悔

言って後悔す

言葉で伝わらない

あるなんて言うなよ

言葉を使い尽くした者だけが

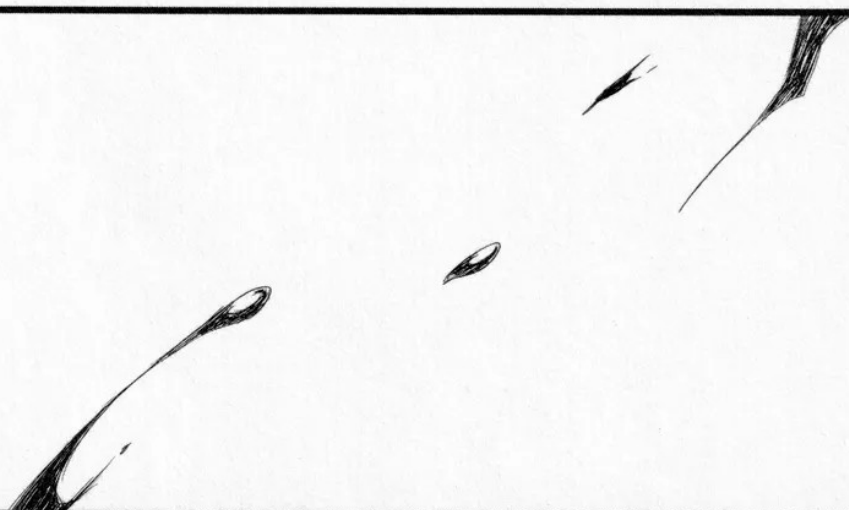
与える言葉

さあ

さあ



ア  
ア  
ン



ハ  
ハ  
ッ



突入!!

被疑者の  
死亡を確認

要救助者  
2名確認  
内1名は重傷

ザッ

ザッ

ザッ

ヨーキンザエル

交渉官

大丈夫

ですか?

あっ

ちよつと...

エンリツヒ!!

バッ

…あれ？

泣いてるの？

いつもはボクが泣いてて  
ヨミくんがボクの涙を  
拭ってくれるのに…ね



いやあ……

今日はボクが  
ヨミくんの涙を  
拭ってあげようかな

……えへへ





でももう...

手... ないんだった

あぁ...



せっかくのチャンスなのに  
残念...





END

■ 奥 付 ■  
美武里の本 5

2012年8月12日 (コミックマーケット82)

発行：美武里

発行者：美雅、和泉美和

Thanks!! やまねこ様、風雷雨シロ様

印刷・製本：緑陽社様

ご意見、ご感想等ございましたら下記までお願い致します。

URL <http://miburi.web.fc2.com/>

無断複写、複製、転載、データ化、共有はダメです。

当然、18歳未満の方の購入及び閲覧は禁止です。



esented by MIBURI

18 for adult only

presented by MIBURI

R18 for adult only

ented by MIBURI

R18 for

美武里の本  
presented by MIBURI

R18 for adult only

presented by MIBURI

R18 for adult only

MIBURI